after the legend

阿雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ａｆｔｅｒ　ｔｈｅ　ｌｅｇｅｎｄ

【Ｎコード】

Ｎ５６４７Ｄ

【作者名】

阿雪

【あらすじ】

勇者伝説から２００年。いまだ語り継がれるその伝説には、二つの裏切りがあった。その真実を知りながら旅を続ける二人の『生きた武器』探しの冒険。２００年前、一体何によって世界は救われたのか？そして、秘めたる二人の目的は？気楽な冒険ストーリー。

（1）はじまり

「ねぇ、話を聞きたくない？」
安っぽい赤いドレスを着た女が言った。
俺と、俺の連れのルディが旅人の集まる大衆食堂に入ると、かならずこういった連中に声をかけられる。俺は女をちらりと見てからルディに視線を向けた。ちょうど、同じように俺を見たルディと目があう。
「聞くわ。」
ルディは俺の意見を聞かずに答えた。
「先払い。」
女は手の平を広げて俺に見せた。俺は荷物の中からわざと高額紙幣を取り出して、女の手の平に乗せた。女は満足そうに頷いて、それをポケットに捻じ込む。おおかた、自分の予想があたっていたことに対する満足だろう。
それも仕方のない事だった。二十歳そこそこ、いかにも剣士といった風情の俺と、十五、六のろくに武器も防具も身に付けていない少女が一緒に旅をしている場合、その関係の多くは主従だ。つまり、ルディは自分専用の護衛をつけて旅をしているどこぞのお嬢様で、金の払いが良い、と判断されたのだった。
女は俺たちの脇に椅子を一つ引き寄せて、話し始めた。それは、勇者の話だった。今からおよそ２００年前、世界は魔女を名乗る一人の女の手によって恐怖のどん底に突き落とされた。魔女は人間であるにも関わらず、世界を憎み、人間を憎んでいた。今となっては詳しいことは分からないが、おそらく魔女は非常に腕の良い魔道士だったのだろう。信じられない奇跡を数多く起こすことが出来、その全てを人間を傷つけることに使った。その暴走を止めたのが、勇者であるという。
女が語るのは、子供から大人までこの世に知らぬものなど誰もい

ない、有名な英雄譚だ。
勇者は魔女と相打ちになり、決して帰って来ることはなかった。けれども、世界を救ったその業績は大きく、いまだに伝説として語り継がれている。――しかし、その戦いに二つの裏切りがあったことを俺は知っている。一つは魔女の側に。もう一つは勇者の側に。その裏切りによって戦いはあっけなく幕を閉じたが、その代償として裏切り者は呪いをその身に受けることとなる。
「ちょっと、聞いてる？お兄さん。」
女が俺の前のテーブルに手を着いた。俺は、はっ、と我に返る。見ると、ルディも俺に視線を送っていた。
「悪い。聞いてるよ。」
俺は女に微笑みかけた。
「そう？じゃあ続きを話すけど」
女は再び話し始める。
「その時、勇者の使っていた武器は、生きた武器だったというわ。今では常識になっている生きた武器も、当時は信じる人が少なかったそうよ。」
生きた武器は、勇者が発見したというのが定説だ。だから彼の英雄譚には必ず、生きた武器の話が出てくる。生きた武器が一体いつから存在したのか、それを最初に使ったのが本当に勇者だったのか。その真実を知っている者に、俺は今まで出会ったことがない。生きているといっても、武器が歩いたり、語ったりするわけではないのだ。最も、ごく稀に、武器の声を聞ける人間がいるというのは知っている。しかし、その人達ですら真実を聞き出せたという話を聞いたことはない。なぜか、使える人間と使えない人間がいる武器。なぜか、声を聞ける人間と聞けない人間がいる武器。だからそれらは、誰からとも無く『生きた武器』と呼ばれるようになった。
「ありがとう。おもしろかったよ。」
話し終えた女に、俺は礼を言う。
「本当かしら？」

女は疑わしそうな目を俺に向けたが、その口元にはすぐに笑みが戻った。
「お兄さん、名前は？」
俺に聞く。
「ランベルだ。」
俺は答える。正確にはフランベルク。ルディはいつも俺を、ランベルと呼ぶ。
「お嬢ちゃんは？」
女はルディにも聞く。
「ルドヴィカよ。お姉さん。」
ルディが笑う。肩にかかる真っ直ぐな紺色の髪と、灰色の大きな瞳がきらきらする。俺の、金の髪と蒼い目の隣に並ぶと、その奥行きがいっそう際立つ。これはひいきめなのかもしれないが、ルディは非常に美人だと俺は思う。まだ幼さこそ残っているが、将来は絶対、誰もが振り向く美女間違いなしだ。
「そう。では、ランベルとルドヴィカ。この街のはずれの街道の入り口の隅に、武器屋が店を出してるわ。そこに行くと良いわよ。」
女はウインクをした。
「え？」
俺は思わず聞きかえす。
「ランベル。私が生きた武器の話をしたときに、視線が一瞬、自分の武器へ泳いだわ。あなた、生きた武器が使える人間ね。」
「や、その……」
当たりだった。俺は、生きた武器に嫌われることが極めて少ない。ルディの視線がちくちくと痛い。
「お金、たくさんくれたからそのお礼よ。幸運を祈ってるわ。」
言うと、女は俺たちのテーブルを離れていった。律儀に、椅子を元の位置に戻していく。
「意外に良い情報をくれたわね。」

ルディが、皿に残った肉をほおばりながら言った。
「嫌だったか？英雄譚？」
俺が聞く。
「いえ、おもしろかったわよ。伝説って色々な形になるわよね。」
ルディは心底感心しているようだ。
「だな。――しかしお前と居ると、本当に情報収集には困らない。」
俺も、やっと残りの食事に手を付け始める。
俺はルディと旅をするまで、情報を集めるのは、酒場が一番だと思っていた。俺が前に一緒に旅をしていた男は、腕はたつが頭の回転はあまり良い方ではなく、おまけに酒が大好きですこぶる人が好かったものだから、情報収集が絶望的に下手くそだった。その当時の俺は、男に意見が出来る立場では全くなく、主従といっても差し支えない関係だった。なので俺は、男が繰り返した酒場での情報収集しか知らずに育ったのだった。
しかし、大衆食堂というのも意外と侮れない。旅人の集まる大衆食堂には、必ず先ほどの女のような芸人が居るし、芸人というのが意外に冒険者から話を聞きだすのが上手だったりするのだ。芸人の話の多くは、今のような英雄譚、勇者の伝説、そして、滅びたどこかの国の話である。ルディはそこに、小さな話の変化を見つけるのが楽しいようだったが、俺は正直もううんざりだった。しかし、お金をつめば、サービスで本業以外の情報を語ってくれる。俺とルディのペアは特に人目を引くので、やりやすく、俺達はすっかり大衆食堂での情報収集を習慣としていた。

女のくれた情報に従って、俺たちは街のはずれを目指すことにした。
「おい、あれじゃないか。」
遠くに人影を発見して、俺は思わずルディに声をかける。
「きっとそうだわ。」
言って、ルディの歩幅が大きくなる。

それは、街道のすみに木の机と小さな木の丸い椅子をちょこんと置いただけの露天商だった。椅子の上に座る男もまた、ずいぶんと歳をとって干からび、すっかり小さくなっていた。けれども、その枯れ木の様に細い手足に刻まれたしわは、大木のそれと同様に見えたし、すっかりくぼんだ薄墨色の目には確かな力強さを感じた。俺は、少なからずその目に好感を抱いた。

「武器が入用かね。」

俺たちが近づいてきたのを見てとったのだろう。武器屋が聞いた。

「そうなの。ちょっと見せてもらえる。」

ルディがまるで、友達に話しかけるかのような気楽さで言って、微笑んだ。別に武器が入用なわけではないが、この場合そう言っておいた方が都合が良いことくらいは俺でも知っている。

「好きなだけ見て行きなさい。ここは武器屋だ。」

武器屋が返した。ルディはお愛想の笑顔を武器屋に見せてから、俺の胸倉をつかんでぐいっと自分の方に俺の顔を引き寄せる。

「ランベル。選んで。とびきり上等なのを頼むわ。」

俺とルディの身長差はおよそ３０センチ。耳打ちをしたいのならこうする他ないのだが、手招きをするくらいのかわいさはあっても良いと思う。これでは見た目通り、いかにも主従関係な風を強調しているだけになってしまう。俺とルディは、決して、決して、主従関係ではないのだ。どこへ行っても主従と思われるし、俺たちもそれを利用しているわけだが、俺とルディの間にそういった契約が交わされたことはただの一度もない。

「ほら、ランベル。悩むことないでしょ。早く。」

もっとも、ルディに全く逆らえないという点では、あるいみ主従といえるのかもしれない。

ルディに急かされて、俺は真剣に武器屋の武器達と向き合った。とりたてて、変わった武器は無いように思える。剣、槍、弓、ナイフ。どれもどこにでもあるデザインだし、材質もありきたりなものだろう。しかし、一番端に置かれたナイフに関しては違っていた。

錆が全体についていて、刃こぼれも目立つ細いナイフ。一見、一番役にたたなさそうだが、わずかばかり違和感のある空気をまとっている。ただのぼろいナイフにはまとえない空気。
「じいさん、これを。」
俺はその、錆びたナイフを指差した。ルディがかすかに微笑むのが見える。
「これ、売ってもらえるのかしら？」
俺の指したナイフをすかさず手にとってルディが聞いた。武器屋の表情は極めて読みにくかった。しかし、くぼんだ目は確かにまばたきを繰り返している。
「言い値で買うわ。いくらなら売れる？」
ルディが重ねて聞いた。
「お嬢ちゃん。悪いがそれは売れない。」
武器屋がぼそぼそと言った。
「知ってるわ。」
ルディが微笑むんだ。今度はお愛想ではない。
「この武器、生きているね。」
俺が聞くと、武器屋は頷いた。
「情報目当てだな。隣の町で、一番大きな屋敷を訪ねるといい。生きた武器を使える人間を探している。」
武器屋は、ルディの手から愛おしそうに錆びたナイフを取り上げた。最も、生きた武器というのは、見た目と切れ味が比例しない。あんなに錆びたナイフでも、普通の武器からは想像もできない切れ味をはっきしたりするのだ。
「残念。私達、長期の仕事は探してないわ。」
ルディが言う。大きな屋敷で生きた武器の使い手を探しているなら、用心棒が欲しいということだろう。
「いや、長期の仕事じゃない。確か、盗まれたものを取り返して欲しい、ということだったと思う。」
すかさず武器屋が否定した。俺とルディは顔を見合わせた。それは

おあつらえ向きだ。
「ありがとう。いくら？」
ルディが聞く。五本の指を立てた武器屋に、ルディは素直にお金を払った。生きた武器を使える人間を集めたい場合、武器屋にその情報を預けるのは、よくある手段である。
「ルディ？あのナイフは良いのか？」
俺は声をひそめて聞いた。
「いいわ。大事にされて、幸せそうじゃない。」
ルディも小声で返す。
「そのうち、困ったことにならないか？」
「そんな意識、残ってないわ。だから、持ち主にも告知は必要なしよ。」
「そっか。」
俺は安堵の息を吐いた。
　ルディは、生きた武器の声を聞くことのできる、珍しい人間の一人である。一般的には知られていないが、生きた武器はまれに、持ち主の心を侵食したり、持ち主恋しさに武器以外の形を取り出すことがある。ルディのような人間は、それを未然に防いだり、持ち主の理解を仰いだりするわけだが、今回はそれも必要なさそうだ。
「それよりも心配なのは盗まれた武器のほうね。」
「え？」
「それが生きた武器だったら、まずいわ。」
ルディは表情を険しくした。
「盗まれたっていう事実が、武器と持ち主に影響を与えないと良いんだけど。」
ルディの口から小さく息がもれる。
「急ごう。」
俺はルディの背中を押した。

（2）依頼

俺たちは『生きた武器』を求めて旅をしている。もちろん、『生きた武器』を求めて旅をしている冒険者なんてごまんといる。それは、研究者だったり、コレクターだったり、もしくはただの剣士であったり。それぞれがそれぞれの思いを胸に生きた武器を求める。

俺達はというと……ある武器を探していた。それが、どこかにあることは分かっている。しかし、一体どこにあるのか、どんな形をしているのか、いくつあるのか。俺達は知らない。それでも、俺達にはどうしても、その武器が必要だった。

武器屋の言う隣の街、は歩きで丁度一日の距離にあった。もっとも、俺達の旅路は女連れにしてはかなり早い。ルディが昔から、夜を恐れないからだ。

森の夜歩きは危険というのが常識だ。しかし俺はかなり剣の腕が立つほうだと思っているし、ルディも魔道士としての腕はかなり良い。だから、事情があれば夜だろうとなんだろうと構わないのだが、ルディはどうやら、夜の森が好きらしいということが最近になって分かってきた。自分の手のひらに魔道でぽっ、と光を灯して、木々の間から獣達の声を聞きながら、星を見上げるのが好きらしい。ルディは本当に星に詳しくて、俺にその一つ一つを丁寧に説明したりするのだ。

そんなわけで、夜通し歩いた俺達は次の日の昼には隣の街に着いていた。一番大きな屋敷は、小高い丘の上から堂々と人々の暮らしを見下ろしていた。

「あなた達で三組目です」

屋敷の扉をノックすると、すぐに執事を名乗るひょろりとした背の高い男が顔を出し、めがねの奥の細い目をさらに細くして俺達を観察しながら言った。

「三組目？」
ルディが聞き返す。
「そうです。希望者全員にいっせいに仕事を説明させていただきます。それまではどうぞ、ご自由に」
執事を名乗る男は、非常につっけんどんで端々に説明が足りなかったが、どうやらルディはそれが気に入ったらしい。
「ありがとう」
とお礼を言う笑顔が生き生きしている。執事はその笑顔にも顔色一つ変えず、俺達それぞれに部屋を割り当て、夕食の時間を告げただけで行ってしまった。仕事の内容は、その夕食の時に聞けるのだろう。思いがけず出来てしまった半日の暇に、俺とルディは正直に戸惑った。街に出ようかとも思ったが、食事は用意してくれるというし、特に入用なものもない。
「暇だわぁ」
ルディは大きくのびをした。俺達は、入り口を入ってすぐにあるラウンジのソファに、二人並んで腰をかけて、暇をつぶすことにした。
「良いじゃないか。忙しいよりは」
俺は、あくびを始めたルディの大きな口を見ながら言った。
「私達って、暇に慣れてないんだわ」
言われてみると、そうかもしれない。俺とルディは出会ってから今まで、休む暇無く『生きる武器』を探してきた。実を言えば、そんなに急ぐ必要などどこにも無いのだ。俺があの勝利のカードを手にしてから、俺達に与えられた時間は限りなく永い。それなのにおかしな話である。
「じゃあ、今から慣れればいいだろ」
俺が言う。
「私、暇なのって性に会わないのよ。ランベル、何かしましょ。何が……」
そう言ってソファの背もたれから身を起こしたルディが、ある一点を見つめたまま、ぴたりと動くのを止めてしまった。

「どうしたんだ？」
俺はルディの視線の先を追う。ルディの視線の先には、先ほど俺達が入ってきた入り口がある。そして、扉を開けて入ってくる二人組み。
俺は、感情の起伏の少ない方だと自負している。長く旅をしてきているし、少しのことでは驚いたり、取り乱したりしない自信がある。そして、それはルディも同じだった。
しかし、今回ばかりはさすがに言葉を失った。すこしずつ俺達のいるラウンジに近づいてくる二人組み。片方はきれいな金の髪を男のように短くしているが、ルディとさほど変わらない小さな背と、丸い輪郭。それに顔のつくりから確実に女だろう。服装が典型的な魔道士のローブなので体型は分かりにくいが、ルディよりは年上の１７、８の印象を受ける。そしてもう一方。こちらは確実に男で、背は、俺と同じ１８０前後。やはり金の髪で、俺と同じような青い瞳。俺と同じような、輪郭、眉、鼻、口。
「信じられない。彼、ランベルにそっくり」
ルディがやっと、口を開いた。

女は名前をエイムと名乗った。男の方はゲージ。いとこ同士だという。俺達と同じく、仕事を探しにきたくちだ。つまり、他の二組のうちの一組ということになる。
「驚いた。本当にそっくりね」
エイムがこの科白を口にするのは、これでもう１２回目だ。
「本当にびっくりしたよ」
ゲージも同じく１１回繰り返された言葉をもう一度紡ぐ。
夕食の席、俺達は自然と隣同士に席をとった。ラウンジで自己紹介を済ませた後、すっかり話がもりあがり、そのまま食堂へとなだれこんだのだ。
１８歳だという二人は、いとこ同士と言うだけあって、かすかに顔つきに同じ血を感じることが出来る。しかし、その二人よりも、は

るかに俺とゲージの顔の方が似ている。俺がもう少し若ければ、見分けがつかないくらいだ。強いて言えば、俺よりゲージのほうが少しだけ髪が長い。
「世の中には、三人は同じ顔の人がいるって言うけど、本当ね」
ルディが俺に微笑みかける。確かにそんな話を聞いたことがあるような気もするが、これは心臓に悪い。
「祖先が、同じだったりするのかしら？　だとしたら、大変なことだわ」
エイムがゲージを力強く小突いた。
「失礼ですけど、出身はどこですか？」
ゲージが突然あらたまって俺に聞く。
「南の方だよ。何も無い、田舎町さ」
俺は適当にはぐらかす。嘘はついていない。
「南？　だとしたら全然方向違いだ」
ゲージが鼻をならした。
「あなた達こそ、どこの出身なの？」
ルディが聞いた。本来、冒険者同士で素性を探りあうことはルール違反とされているが、今回は仕方がないだろう。なにしろ、俺達はそれほどにそっくりなのだ。
「私達は、シュナイプという街の出身よ。ご存知ですか？」
エイムが言った。
「シュナイプ？」
なぜか、聞き覚えがある。俺は、地理にはめっぽう弱いのだが。
「勇者の生まれ故郷だわ。違う？」
ルディが静かな声で聞く。さすが、俺とは伝説を聞く姿勢が違うだけある。
「正解よ」
エイムが微笑む。
「実は俺達、勇者の血を引いた人間なんだ」
「えぇ！」

思わず大きな声をあげたのは、恥ずかしながらも俺。
「勇者に子供はいなかったと思うけど」
至極冷静に質問をしたのがルディ。
「いや、直接の子孫と言うわけではなく、勇者の双子の弟の子孫です。だから、正確には勇者と同じ血を引いた人間、というか……」
ゲージが答える。俺はほっと胸をなでおろした。勇者に子供がいたなんて、冗談じゃない。
「でも、魔女の丘を作ったのは私達のご先祖さまだわ。勇者の弟が魔女の丘を作ったから」
エイムが、少し小さな声で付け加えた。
『魔女の丘』別名『魔女の墓』。勇者と魔女の戦いが相打ちに終わった後、魔女の死体を封印した場所をその様に呼ぶ。丘のように高く土を盛り上げ、その上に特殊な花で魔方陣が描かれている。当時の人が、魔女の復活を恐れてやったのだろう。俺とルディは、一年に一度、そこを訪れることを習慣にしていた。あわせて、その正面に建てられた勇者の石碑に花を供えることも忘れない。
「じゃあ、魔女の死体を発見したのって、勇者の弟ってことに……」
ルディが言いかけたその時だった。
「皆様」
丁度良いタイミングで背高執事が現れて、手を二回、パンパン、とたたいた。
「皆様」
彼はもう一度言った。
「せっかくお楽しみのところもうしわけございませんが、我が主人より今回の依頼についての説明がございます」
執事は、めがねを指でつい、と上げた。
「知ってる？　ここの主人は武器のコレクター兼研究家として有名なのよ」
エイムがそっと耳打ちする。ちらり、とこちらに執事の視線を感じたが気にしない。

すぐに、主人らしき男が食堂に入ってきて、話がはじまった。

屋敷の主人は執事に似て細く、しかし決して背は高くなく、どちらかといえば低い身長と派手な服、それに不釣合いな大きな足。顔にはどうどうとひげを生やし、黒々とした髪が４０を過ぎて見える顔の割には立派なのだが、大きなキョロリとした目のせいで、威厳を保つのには足りなかった。彼はゆっくりと食堂に入ってくると、真ん中でぴたりと止まり、直角に向きを変えて俺達の方へ向き直った。

「皆様、こんばんは」

彼は、その背からは想像のつかない大きな、低い声をしている。

「このたびはお集まりいただきありがとうございます。私はこの屋敷の主、アギルスと申します。前置きはいらないでしょう。単刀直入に申します。皆様には、盗まれた私の『生きた武器』を救出していただきたい」

俺はルディの顔を覗いてみた。ルディは、依頼主の好き嫌いで仕事を選ぶ傾向がある。

「悪くないわ。救出というのが気に入ったわ」

ルディは小さな声で呟く。これでどうやら、俺達がこの依頼を請けるのは決定したようだ。

「今から、皆さんにその武器を描いたものをお見せします」

アギルスが言うと、執事が一枚の絵画を運んできた。大きさは３０ｃｍ四方。絵画としては大きくないが丁寧に描かれた油絵で、急ぎで用意されたものではなさそうだ。恐らく、武器が盗まれる以前からあったものなのだろう。先ほどの言い回しといい、この男はどうやら『生きた武器』を本当に生きたものとして扱うことに慣れているらしい。

「これが、今回盗まれた『生きた武器』です」

それは、剣のように見えた。絵なので大きさは定かではないが、形状としては剣。しかし、かなり変わった形をしている。もち手のと

ころに炎を形どったような飾りがついているし、刃の部分のカーブもきつい。きれいではあったが、実用的ではない。使い勝手は悪そうだ。
「一応、私のところにあったときはこの形をしていました。が、皆さんの中にもご存知の方がいると思いますが、『生きた武器』は形を変える事があるのです」
アギルスが言った。
「ちょっと待って」
ストップをかけたのはエイムだ。
「私は、エイムと申します。私達は長く『生きた武器』を探して歩いていますが、そんな話は聞いたことがないわ」
エイムは立ち上がって発言をした。
「なるほど。まあ、知らない人の方が多いですからね」
アギルスは余裕の笑みを浮かべると、執事を呼びつけた。2，3耳打ちをする。執事はそそくさと食堂を後にし、すぐになにやら石のようなものを持って戻ってきた。
「だれか、この鉱物を知っている人はいますか？」
アギルスが聞く。
「カランヤだわ」
俺の隣でルディが言った。
「その通りです」
アギルスの視線が俺達の方に移ってくる。
「君、これを」
俺のことを呼んだらしい。俺は、席から立ち上がってアギルスのもとに歩み寄った。
「もってみたまえ」
言われるがまま、俺はカランヤと呼ばれる鉱物を手にとってみる。それは、灰色の何の変哲も無いただの石見えるし、実際持ってみても、やっぱりただの石だ。
「これが何か？」

俺はたまらず聞いてみる。ルディが面白そうに俺を見た。
「このカランヤという石には、ある特性があります。えっと……」
「ランベルです」
「ランベル君。なにか、想像してみてください。君は剣士のようだから、自分の武器が良い」
「想像……」
意味が分からない。が、俺は言われた通りに自分の武器を思い浮かべる。もう、長く連れ立っている剣だ。想像するのは簡単だ。思って俺は目を閉じた。――途端、手に違和感を感じる。
「え？」
開けた俺の目に飛び込んできたのは、まぎれも無く俺の手に握られた俺の武器だった。
「なんだ、これ？」
俺はルディに助けを求めた。
「カランヤという鉱物は、人の想像力に反応して形を変えるのよ。今はランベルが想像した剣の形になってるでしょ」
ルディは笑いながら俺に近寄ってきた。
「魔道士が修行をする時によく使うわね」
エイムが付け足す。魔道士には、物事を想像する能力が必要な場合がある。
「実は『生きた武器』は、このカランヤを多く含んでいるのです。だから、形を変えるというのもあながち嘘とは思えない。事実、そういった例も近年多く報告されています」
さすが、研究者と言うだけあってアギルスは『生きた武器』の現状に詳しいようだ。確かに、『生きた武器』は形を変える。俺は、その仕組みについては全く知らないが、それだけは確かだ。
「ただ……」
言いながらアギルスが、いきなり俺に向かってナイフを振り下ろしてきた。
「うわっ」

俺は思わず自分の手にあるカランヤの剣で受けてしまう。カランヤの剣は、何の抵抗も無くポロリとくだけた。
「見ての通り、カランヤというのは非常にもろい。加工をしてもほとんど硬度は上がらないのです」
「つまり『生きた武器』をつくっている要素は他にもあるということよね」
エイムが言う。
「そうです。しかし、それについては未だ研究中です。けれども『生きた武器』が姿を変えることは納得いただけましたか」
エイムはちら、とゲージを見たが、じぶじぶながら頷いた。
「よかった。では、私の武器を探してください。私は２０年あの武器と一緒にいますが、姿を変えたことはありませんでした。なので、おそらくあの姿のままだろうと思います」
「あの、賊の正体については、見当がついているのですか？」
手を上げて質問をしたのは、俺やゲージ達とは別のグループの人間だった。彼らは男女入り混じった5人のパーティーで、俺の見たところによると小柄な三白眼の男意外はあまり期待できないだろう。
「いいえ、全く」
アギルスは笑顔だったが、決して笑っているわけではなさそうだ。
「犯人の後始末は？」
「あなたたちのご自由に」
冒険者の中には、犯罪者を捕まえることで金銭を稼ぐ者達もいる。彼らは、そういったタイプの冒険者のようだ。
「報酬は？」
今度はエイムが聞いた。
「聞くところによると、あなたたちも『生きた武器』のコレクターだとか」
アギルスは、一歩、ゲージたちの方へと近づいた。
「俺達は、歴史の研究家です。勇者の武器を探しています」
ゲージが言う。俺はぎょっとした。

「ほう、勇者の武器ですか」
アギルスも少し目を大きくする。
「ええ、勇者の使っていたとされる武器は、彼の失踪とともに消えています。俺達はそれを探しているのです」
ゲージはよく通る声で言った。
「失踪とは、おもしろい見解ですね。彼は、魔女と共に亡くなったのでしょう」
アギルスが言う。話の展開が、ルディ好みになってきた。
「死んだのは、確かだと思います。彼の双子の弟が、そう証言しています。でも、見つかったのは魔女の死体のみでした」
「魔女の丘ですね」
アギルスもなかなか勇者伝説に詳しいようだ。それもそのはず。『生きた武器』は勇者の発見したものとされている。武器の研究者は勇者伝説を研究するはめになるし、逆もまた然りだ。
「では、あなた達は報酬として『生きた武器』をお望みですね。私は、現金で払うつもりでしたが」
アギルスが言った。
「あなたのコレクションを見せてください。目的のものが見つかったら交渉の余地をいただきたい。無かった場合には、現金で頂きます」
ゲージは交渉が上手そうだ。
「その条件をのみましょう。ただし、現金分はその分、引かせていただきます」
アギルスが言った。
「他の方は？」
食堂を見回しながら聞く。
「俺達は現金で構わない。ただ、犯人は引き渡してもらえると嬉しい」
例の、三白眼の男が言った。俺達は、頷く。
「ルディ、俺達はどうする？」

条件をつけられるのなら、つけておいたほうが良い。
「私達も、コレクションを見せてもらいましょう。可能性は低いけど、私たちの探し物があるかもしれないわ」
ルディの判断に従って、俺達も武器を見せてもらえる約束をとりつける。
「では皆さん、出発は明日の朝。報酬は、成功者にのみさしあげます。今夜はゆっくり休んでください」
アギルスが微笑んだ。

「新しい話が聞けたわ」
夕食後、ルディは俺のベッドに寄りかかりながら、明るい声をだした。どうやら、勇者伝説のことらしい。
「よかったな。俺はひやひやしたけどな」
俺は、ベッドに寝転がりながら言った。
「勇者って弟が居たのね。知ってた？」
ルディが俺の顔を覗き込む。
「そういえば、聞いたことあったかもなぁ」
俺は、うわの空で答える。
「それにしても似るのね。子孫ってあんなに似るものかしら？しかも弟の子孫でしょ？」
ルディが首を傾げた。
「弟って言っても双子だぞ。本人の子孫のようなもんだ。全員が全員、あんなに似てるとは思わないけどな」
俺は、天井を見つめた。明日俺達は、あの勇者の子孫達と行動を共にすることになるだろう。かつての勇者シュルツと似た二人組みと。

（2）依頼（後書き）

一言でも良いので感想をいただけると嬉しいです。

（3）道のり

朝が来て、俺はため息と共に目を覚す。起ききらない顔でルディの部屋を訪ねると、ルディがあからさまに嫌な顔をした。
「何、その顔？」
ルディが聞く。
「意思表示だ」
俺は、大きく息を吐いた。ルディは全く気にしていないようだが、俺はゲージ達と旅路を共にするのは嫌だ。鏡を見ているようで気持ちが悪いし、第一、勇者の遺物を追っている人たちと行動を共にするなんて頭が痛い。
「意気地なし」
ルディは冷たく言い放し、部屋を出て行ってしまう。
俺は、別に意気地なしでも構わない。いや、自分が意気地なしとは全く思わないが、それでも今回ばかりは、ルディの罵りを甘んじて受けよう。あの顔は、俺の心の奥底の、忘れたくて仕方の無いことを思い起こさせる。
「ランベルは何も悪くないのよ。気に病むことなんてないわ」
ルディを追いかけて部屋を出ると、彼女は俺の部屋の前で待っていてくれた。
「何も気には病んでない。ただ……こう……いたたまれないんだ」
俺とルディは食堂に向かう。
「毎日鏡で見てる顔じゃない。いい加減、なれたでしょ」
「俺は鏡は見ない」
「うそ」
もちろん、嘘だ。どうせルディは、俺を甘やかさない。どんなに異を唱えたって、逃げられないことから逃がすことはしてくれない。つまり俺は、おいしいおいしい朝食を食べて、ゲージ達と盗まれた武器を探すのだ。嘘くらいつかせてもらう。

俺達は予想通り、ゲージたちと行動を共にすることになった。5人組のパーティーも何となく一緒に動くことになる。賊の正体は検討がつかないということだったが、向かったのはおそらく、リンブという港町で間違いがないだろうとは、全員の共通の認識だった。特に、五人組のパーティーの中に精霊使いがいて、彼女の意見でも、賊はリンブに向かった可能性が濃厚とのことだ。

リンブまでは、俺とルディなら2日もあれば十分だが、この大人数ではもう少しかかるだろう。賊を追っているので、それでもかなりのハイペースだ。森をいくつか抜けなくてはならないが、大きな港町に続く路なので整備された退屈な路のりである。ちょうど良いので、ぼうっと歩きながら勇者伝説を整理することにした。

俺達は、ある武器を見つけることを目標に旅をしている。が、あえて使命をあげるのならば伝説集めとその修正がそうなのだと俺は思う。俺はあまりまじめに取り組んではいないが、ルディは自分の趣味も手伝って、ずいぶんとまじめにあちこちの勇者伝説を聞いて回っている。聞いて、そして間違いを修正するのだ。間違った方向に伝説が進まないように……大きすぎず、小さすぎず勇者の功績を称えるように。そして、あの戦いの真実に近づかないように。

俺の知る限り世間一般で語られている勇者伝説は、至極単純だ。まずシュルツ……いや、勇者が小さな田舎町で生まれたところから物語は始まる。彼の生まれた町は決して裕福ではなく、けれども町人同士が仲良く暮らしていける程度には恵まれていて、そして彼はその町の領主の息子であったという。かといって、特別な暮らしをしていたわけでは無かったようだ。普通に暮らし、普通に育ち、普通に――世界の他の人間と全く変わらない状態で――魔女の恐怖を知った。彼が魔女退治を思い立ったのは、腕に少しは覚えがあるのと、領主の息子としての自尊心によるものだったのだろう。シュルツは、仲間の一人もつれずに単身、魔女狩りに行ったのだった。そして、見事成し遂げた。ただし自分の命と引き換えに、だが。

俺は、少し前を歩くルディをちら、と見た。ルディはすぐに気づいて、俺の横に並んでくる。
勇者伝説には、勇者の死の後にも少し続きがある。勇者が魔女と相打ちに終わったということは、戦勝報告をしたのは別人ということだ。それが、魔女の丘をつくった魔道士だといわれている。シュルツのすぐ後に、同じく魔女の首を狙って魔女の住処を訪れたが、すでに戦いは終わっていた。そこで、魔女の死体を封印する役目を請け負うことになったというわけだ。この魔道士については、その姿も、名前も、全く語られることがない。伝説によると、魔道士自身が拒否したという。自分を伝説として語ることで、勇者の功績を濁らせないで欲しいという願いがあったようだ。しかし
「魔女の丘をつくったのがシュルツの弟なら、魔女の死体の発見者もシュルツの弟だよな」
俺は隣にいるルディに話しかけた。ルディは少し険しい顔をして
「勇者って言いなさいよ」
と俺を戒めてから首を傾けた。
「どうやらそうらしいわね。ただ、ゲージ達は、あまりそれを口外する気はないみたい」
俺は頷く。
「だろうな。口外する気なら、もうとっくに広まってる。おそらく意図的に隠してきたのだろうな」
それは、当然と言える気がした。シュルツが勇者になったのは、魔道士の証言があったからだ。彼が魔女の死体を見たと言い、自分の前にここを訪れた人間が勇者だと語った。彼は決して嘘をついていないが、それでもシュルツの身内では信憑性が薄れてしまうと考えたのだろう。
「勇者の弟は、おそらくお兄さんが心配だったのよ。だから、こっそりと兄の後を追いかけたんじゃないかしら」
「でも、双子じゃ顔がそっくりだろう」
魔女の棲家は、切り立った山の頂上にあり、そこへ行くには唯一つ

の路しかなかった。何も知らない旅人がうっかり迷い込まないように、その一本道の入り口は近隣住民によって組織された自警団が常に守りを固め、行き来――帰って来たのは例の魔道士一人だが――を管理し、実力不足と判断された者は立ち入りを許されなかった。その路を通ったということは、実力検査もされたわけで、もちろん、顔もわれているということだ。

「弟は、自分が勇者になる気は無かったのだろうし、兄の様子を見にきただけのつもりだったら、顔を隠していた可能性は十分にあるわ。魔道士だったと言うなら、ローブのフードで顔を隠すのも簡単だし」

そして、兄の様子を覗き見て、あるいは死体だけでも回収して逃げ帰るつもりだったのだろう。兄の名誉を傷つけないため、顔をさらすわけにはいかなかった。

「じゃあ、魔女の死体を発見して驚いたろうな」

驚いて、そして兄の姿を探したのではないだろうか。喜びを分かち合うために。

「でも、そこには兄の姿はなかったわけよね」

「兄の姿どころか、兄の武器すら存在しなかった。今思えば、シュルツが魔女を倒した証拠はどこにも無かったんだ」

けれども、弟には確信があった。兄が、魔女を倒したのだという。魔女の棲家には、たくさんの勇者になれなかった者達が幽閉されていたはずだが、兄の姿がなかったのも彼の確信をより確実にしただろう。

「急いで自警団のところに戻って、魔女の死を報告する。その後、魔女の死体を封印すべきだ、という話を持ち出せばあの場は混乱するし、勇者の死体が無いことなんて誰も気にしなかったでしょうね。魔道士に関しても、本人が素性を明かしたくないと言えば、それを深く追求されることも無かったと思うわ」

ルディは少し、声のトーンを落として言った。

「その後はすっかりお祭りムードだったろうしな。魔道士はその騒

ぎに乗じて姿を消したかもしれない」
「真実を自分の一族だけに、語りついで、ね」
ルディがにこりと微笑んだ。
「だな」
俺は、思わずため息だ。
「ランベル、これは伝説にふさわしくないわ。私達は知っておく必要があるけれど、基本的にはゲージたちと同じ姿勢でいるのが良いわね」
俺は深く、深く頷いた。つまり、これが俺達の本来の仕事だ。勇者の英雄性が失われることは、俺達にとっても不都合だった。

何事もない平和な旅路がしばらく続いて、それでもようやっと二日目の夕方に、俺達は一つの情報を手に入れた。
「リンブから出るはずの船が、全部ストップしているんですって。」
その情報をくれたのは、ちょうどすれ違った旅人で、俺達の少し前を歩いていた五人組のパーティーの精霊使いも、わざわざ知らせに来た。俺達はしぜん、九人で集まって話し合いをすることになる。
俺は、ここで初めて五人組の名前を知った。
一番実力がありそうな三白眼の男がジェイル。剣士。精霊使いがマーシア。やたらと大きいのが戦士のトッド。デイアンという男とクレアという女が二人とも魔道士を名乗ったが、どうやらタイプが違いそうだし、単純に魔道士といっても色々いるから他人への自己紹介なら、まぁ、この程度だろうという感じ。
「で、マーシアが言うには、賊もリンブで足止めをくらっている可能性が高いというのね」
話し合いを取り仕切っているのはエイムだ。どうやら彼女は、こういった時に主導権を握るのが得意らしい。
「どうしても船で他の大陸に渡りたいんだろうな」
言ったのはジェイル。彼は腕だけでなく、頭も良さそうだ。
「賊が盗んだ『生きた武器』を使いこなせるとは限らないのよね」

エイムが言う。
「だとしたら、日数がかさむほど危険が増える。呼ばれて無いやつが使おうとすると取り込まれる可能性があるからな。賊が『生きた武器』を使えない人間であることを祈ろう」
「ちょ、ちょっと待って」
ジェイルのせりふにストップをかけたのは俺だ。みんなの視線が一同に集まる。
「なに？」
代表してエイムが聞きかえす。
「いや、『生きた武器』を使える人間なら問題ないんじゃないか？使えるってことは取り込まれないってことだろ？」
俺が言うと、ルディが小さくわき腹をつついた。どうやら、あまりしゃべるなと言いたいのだろう。しかし、俺だって『生きた武器』使いの端くれのつもりだ。興味はある。
「ランベル　その武器はどうやって手に入れた？」
不思議そうな顔でゲージが聞いた。
「どうやって、て……」
残念ながら俺のばあい、それは皆に語れる手段ではない。
「あのさ、俺も『生きた武器』を使うけど、正直、この武器には呼ばれたよ。他にもいくつか『生きた武器』を持っているけど、全部呼ばれた。『生きた武器』は持ち主を選ぶんだ。そして、よぶだろう？」
「そ、そうかな？」
俺は武器に呼ばれたことなんか無い。
「いくら『生きた武器』を使える人間だって、呼ばれない武器を使いこなすことは出来ないのが普通だ。強い精神力を持ってればどんな武器でも使えるって聞いたことがあるけど、本当かどうかは分からない」
俺は、どんな『生きた武器』だって確実に使うことが出来る。
「『生きた武器』を使えない人間にとって『生きた武器』って飾り

にしかならないでしょ。でも、使える人間は使えちゃうからまずいのよね」
エイムが言った。
「正確に言うと、ただの武器としてなら普通の人にも使える『生きた武器』はあるよ。ただ、今回の武器はかなり変わった形をしていたから『生きた武器』使いにしか使えないと思う」
俺だって、そのくらいの知識はある。打撃系の『生きた武器』は普通の人でもただの武器としてなら使えることもあるのだが、剣とかナイフといった『生きた武器』は普通の人には何の意味も無いことが多い。困ったことに『生きた武器』というのは、その手に持つと使いたくて仕方がなくなってしまうらしい。俺には分からない感覚だが、それによって武器に取り込まれる人が後を絶たない。
「コレクターとかは武器が使いたくならないのかしら？」
俺が疑問に思っていたことをルディが聞いた。
「コレクターはさ、使おうという意志がないから使いたい、という衝動に駆られない。それに賊が『生きた武器』を使えない人間ならたぶん問題は無い。問題なのは、呼ばれていない武器を使おうとすることだと思うんだ」
『生きた武器』には、まだ分かっていないことが多い。俺達は、ルディの特技のおかげでそれなりに詳しいと思っているが、しかし、正式な研究者たちと比べるとやっぱりまだまだだ。
「あなた達って、生きた武器の研究をしているわけではないの？」
エイムが言った。
「俺達のは趣味の域だよ。一応探している武器があるんだけど、急いでいるわけじゃないし」
俺は微笑んだ。
「あら、人生って短いのよ。急げるところは急がなくっちゃ」
エイムのウインクは俺にはまぶしすぎた。
「で、どうするのが一番いい？」
ゲージがみんなの顔を順番に見つめて言った。

「とにかく、急ごう。一気にペースを上げてリンブまで」
ジェイルの提案に一同は頷いた。ここからのハイペース。ルディはきっと喜ぶだろう。

（3）道のり（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。
もうちょっと続きます。
何か一言いただけると嬉しいです。

（4）交渉

リンブまでの残りの道程は、本当に早かった。急いだのだから当然といえば当然だが、その行程で女性陣の誰も音を上げなかったのは見事なものだ。皆、それなりの実力者ということになる。最も、情報入手方法がそれなりに変わっていたので、駆け出しの冒険者は引っかからない。目的地が同じなので皆で行動を共にする、というのも経験者同士ならではの暗黙の了解だ。お互い、目的の物に巡り逢うまでは余計な体力を使わないほうが良い。となると、ここから先は手を取り合って仲良しこよしというわけにはいかなくなる。

「おい。俺たちはバラけるぞ」

案の定、真っ先にそう言い出したのはジェイルたちのグループだ。俺たちも素直にそれを受け入れる。あとはエイム達だが

「私たちも行くわ」

意外にも、エイムが言い出した。

「一緒に行動したい気もするけど、仕事は仕事だからね」

ゲージも微笑んだ。それはもちろん、俺たちにとっては好都合なわけで。

「わかったわ。じゃあ、また会えるといいわね」

きっとまた会うだろうな、と思いながら俺は、ルディが手を振っているのを見守っていた。

生きた武器が人を取り込むことがある。

そんなのは、とっくに知識として知っていたつもりだった。けれども、未だに自分の目で見たことは無い。

「きっとランベルはショックを受けると思うわ」

と、ルディが言った。

「何が」

俺は聞き返す。

「だから、武器に取り込まれた人間を見たらショックを受けるわ」
そんなことを言うルデイだって、ずっと俺と一緒に旅をしてきたのだ。それを見たら、やっぱりショックを受けると思う。
「俺はさ、どうしても武器の味方をしてしまうと思うんだ」
リンブの大通りを、二人ゆっくりと歩きながら俺は言った。もし、賊が本当に武器に取り込まれてしまったのならば、それなりに騒ぎになるはずだ。しかし今の所、それらしい噂は耳に入ってこない。となると賊は、生きた武器が使えない人間だったということだろうか。
「やっぱり仲間意識みたいなものがあるの？」
ルディが聞く。
「相手の言っていることがわかって、一生懸命それに答えているのに、絶対にその答えが返ってこないっていうのは、結構しんどいもんだ」
俺は昔を思い出してみた。どうにもゲージ達と会ってからというもの、俺は昔を思い出して感傷的になって仕方が無い。やはりあの顔は、俺にとって毒のようだ。
「そりゃあ私だって、武器の声が聞こえるんだから、それなりに武器の味方をしたくなるとは思うけどね」
ルディが軽く伸びをしながら言った。――その時だった。不意に、ルディの腕を鷲掴みにした男がいた。俺は反射的にその手をはねのけ、ルディとその男の間に割って入り、剣の柄に手をかける。男はそんな俺の反応に、ただの少しも武器を出してくる素振りを見せず、しかしただただ驚いたように俺とルディの両方に交互に視線を走らせ、そして言った。
「あんた、武器の声が聞けるのか」
その言葉を聞いて、俺は、俺の予想していた最悪の展開では無いことを悟り武器にかけた手を緩める。
「生きた武器の声なら」
何かが起こった時のルディの答えはいつも、簡潔になる。

「本当に、武器の声がきけるんだな」
男は再度、確認をする。
「同じことを二度言うのは好きじゃないわ。頼みがあるのならはっきり言って」
ルディは恐らくわざと、苛立ちを含んでいった。
「生きた武器に取り込まれた人間を助けることも可能か？」
男は重ねて聞いてくる。
「場合によっては」
ルディが答える。
「なぁ、本当に言いたいことがあるならはっきり言えよ」
俺は、回りくどいのは嫌いだ。思わず口をだす。
「いや、その、な」
男はさらに言い淀む。俺とルディはしばし、その次の言葉が紡がれるのを待ったが、男はなかなか話し出しそうにない。
「ランベル。行きましょう」
その様子を厳しい目で見ていたルディが冷たく言い放つのに、そんなに時間はかからなかった。この男に話したいことがあるのは明らかだし、俺はもう少しなら待ってあげてもいいかな、などと思っていたがルディがそう言ったら、俺の意見を聞くはずもない。
「いいのか？」
一応、意見はしてみるが
「いいのよ」
やはり、無駄なようだ。正直、この男が本当に生きた武器がらみの問題を抱えているのなら、今回の依頼につながらないとも言い切れないと思うのだが。
「わかった」
俺はひとつ頷いて、ルディの意見に従うことにする。さっと、男に背中を向けて、ルディはすでに歩き出していた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。頼む」
そう言ってルディの背中をすかさず追いかけたのは、残念ながら俺

ではなくて、その男だった。
「何？」
振り返ったルディの顔に、明らかな作為を感じ取れたのは、恐らく俺だけに違いない。なにしろルディとは永い付き合いだ。最初に会ったのは確か……今さら思い出すのも面倒だ。
「頼む。内密に頼みたいことがあるんだ」
男が言った。
「内密に？」
ルディが静かに繰り返す。
「あんまり表ざたにしたくない」
それを聞いて、ルディはクスリと笑った。
「いいわ。聞きましょう。生きた武器の声が聞ける人間が必要なのよね」
男は無言で頷いた。昔からルディは、運だけは良い。その分俺は、全く運がないので二人で居ると丁度良い。

男に案内されてやって来たのは、馬小屋、のように俺には見えた。と言っても、誰かの馬が居るわけでなく、かつては馬小屋であったのだろう、という場所だ。
「ここに何があるんだ？」
俺が聞く。男は相変わらず黙ったままで、それでもそれなりに広さのある馬小屋のなかをずんずんと奥にすすんでいった。ルディが黙って着いていくようなので、俺もそれに従うことにする。
ふと、男が馬小屋の一番奥の一角で立ち止まった。
「これを見てくれ」
男がやっと口を開く。俺とルディは、男に言われた通りに奥を覗き込んだ。
「これは」
先に言葉を発したのはルディだ。
「最悪だ」

続いて言ったのが俺。
そこには、結界で二重にも三重にも縛られた少年が居た。そしてそれは明らかに、正気を失っている。
「武器に取り込まれたのね」
ルディが聞いた。
「そうだ」
男は短く答える。
「誰なんだ？」
俺が聞いた。
「……俺の、息子だ」
男は少し間を空けて、ゆっくり、ゆっくりと答えた。
年のほどは１５、６だろうか。ルディとさほど変わらなく見える。
一見、普通の少年だが、その尋常じゃない暴れようと、焦点の合っていない視線から、彼が今すぐにでも助けを必要としていることが見て取れる。
「一つ、質問をしたいんだけど」
ルディが少年から視線を外して言った。
「何だ？」
「この武器の入手方法が知りたいわ」
ルディがいきなり確信に迫る。
「息子が……息子がどっかから持ってきたんだ」
「信じられないわね」
ルディは両の肩をあげて見せた。
「気がついたら息子はこの状態だった」
男はさらに言葉を紡ぐ。ふぅ、とルディの口から息がもれた。何も言わずにきびすを返そうとする。
「わかった。言う。正直に言う」
男は先ほどとまったく同じような反応を見せた。どうやらルディは、それに腹がたったらしい。
久々に見る本気の顔で男を睨むと、ゆっくりと顔を近づけた。

「あのね、さっきも言ったと思うんだけど、私は同じことを二度言うのは好きじゃないの。あなたが本当に大切なものをしっかりと見極めたら、声をかけてね」
今度こそ本当に、ルディは去るつもりだ。
「待ってくれ」
男が情けない声をあげる。
「息子さんには悪いけど、息子の命と自分の保身を天秤にかける人は信用しないわ」
ルディはさくさくと歩き出す。
「おじさん、悪いな」
本当にあの息子にはかわいそうなことだが、ルディがやらないといったらやらない。俺ではあんまり助けになりそうもないし、仕方なく俺はルディと共に馬小屋を後にする。
「ごめんね、ランベル。ジェイル達を探しましょう。」
もちろん、ルディがあの親子をあのまま見捨てないとの確信があってのことだが。
「了解。ま、あの親父は少し思い知ったほうが良いよ」
「ありがとう。でも、報酬は何とかするわよ。任せといて」
「そうこなくっちゃ」
俺の笑顔に、ルディも笑顔を返してくれる。俺はかつて、この笑顔を守るためだけに全てを捨てたのだ。この笑顔だけは、何が何でも守り通してみせる。

事情を話して馬小屋に行くように言うと、ジェイルが渋い顔をした。
「手柄を譲られるのは好きじゃない」
だろうな、と俺は思う。ジェイルはいかにもプライドが高そうだ。
「譲るつもりはないわ。対等な取引をしようと思っているんだけど」
ルディが言うと
「なるほど。聞こう」
と意外と素直に応じた。

「で、取引内容は？」
ジェイルが促す。
「賊は引き渡すわ。でも、報酬は譲って欲しいの」
「全額か？俺達は金で報酬を受け取るつもりだか、かなりの金額を期待してる。あんたらはコレクションを見せて欲しいんであって、そんなに大金はいらないんだろう」
「コレクションを見るのは……あきらめる。せめて報酬だけでも手に入れさせてもらうわ」
ルディは淀みなく言った。
「フェアじゃないな」
ジェイルが言う。
「情報料よ。情報がどれだけ重要か、あなたは知っているはずでしょ」
「高すぎる。その情報を使って、あんたらが賊を捕まえられたかどうかは分からないだろう。君らが賊を捕まえ損ねれば、情報は自然に流れてきた可能性がある」
「私達は捕まえられたわ」
「口で言うのは簡単だ。報酬の3分の1。それくらいが妥当だろう」
「捕まえられた自信があるの」
「証拠がない」
「――私は武器の声が聞ける」
ルディが言葉を発する前にとった間は、明らかにルディの作戦によるものだった。が、しかし、それを聞いたジェイルはすっかり、その間の雰囲気に呑まれて言葉をつまらせた。
「私は、武器の声が聞けるのよ」
ルディが再びゆっくりと繰り返す。ジェイルの視線が少し、仲間の間を泳いだ。
「なるほど。その情報も込みでその値段なら高くない」
ジェイルの口元に笑みが浮かぶ。実際、高くないどころか大安売りだ。冒険者が、武器の声が聞ける人間を探すのは至難の業だ。仲介

をしてくれる人間もいるが当然、法外な金額を要求される。逆にいえば、俺たちはこのルディの特技のおかげで簡単に大金を手に出来るわけだが、ルディはこの特技を人に知られることをあまり好まない。結果、よっぽど追い詰められた時にしか、この特技を口にすることは無いわけなのだが。

「賊の顔を覚えてるか？」

交渉が前進した。

「覚えてるけど、多分、ランベルの方が正確だわ」

ルディが俺をちら、と見る。確かに、俺はかつてそういった訓練を受けていた。

「ランベル。どんな顔の奴だった？　この中にいるか？」

そう言ってジェイルが取り出したのは、手配書の束だった。

俺は手配書なんてものは始めて見るが、決してそれは表に出さないように気をつける。ルディの交渉はまだ終わっていない。迂闊な行動は彼女の機嫌を損ねかねない。

俺は手配書を受け取って、丁寧にページをめくった。それぞれ、その人物の特徴、手配書に名を連ねたわけ、似顔絵、そして賞金が記載されている。俺は男の顔を思い出す。確か、ひげ面だった。けれどもひげなんていくらでも伸びる。見えてた部分から輪郭を想像して……それと、目と鼻だ。年を重ねると目の印象はどうしても変わってくるが目と鼻の配置だけは絶対に変わらない。息子にも盗みをさせているならば筋金入りということで。

「こいつ」

俺は、手配書の中の一枚を指差した。

「そう？」

ルディが覗き込んで聞いてくる。

「うん。こいつだよ。間違いない」

手配書の似顔絵はかなり若いころのもののようだが、明らかに面影がある。かなり良い値がついている。

「ふぅん。じゃあ、交渉成立だわ」

ルディが言って、ジェイルを見る。俺もつられてジェイルの顔を見る。

「悪くない。交渉成立だ。場所を教えてくれ」

にやりと笑うジェイルを見て、この二人は意外と気が合うのではないかな、と思ってしまった。もっともルディに言ったら鼻で笑われそうだが。

（4）交渉（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
今回は短めです。次で解決するはずなのでよろしくお付き合いください。
感想などいただけるととても嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5647d/

---

after the legend

2010年10月28日03時14分発行